

2010—2011 年度国際ロータリー第 2790 地区第 10 分区
 合同例会及びロータリー情報研究会

テーマ 『私たちは、なぜ週一度ロータリーに集うのか』

日時…平成 22 年 10 月 8 日(金) 場所…ザ・クレストホテル柏

プログラム

【合同例会】		司会 補佐幹事 杉山 智
11:30～	登録開始	
12:00～	昼食	
12:30	点鐘	ガバナー補佐 飯合 幸夫
	国歌斉唱「君が代」	
	ロータリーソング「奉仕の理想」	
	地区委員ご紹介	ガバナー補佐 飯合 幸夫
	参加クラブご紹介	ガバナー補佐 飯合 幸夫
	ホストクラブ会長挨拶	柏西 RC 会長 中村 佳弘
	幹事報告	柏西 RC 幹事 森市 直樹
	点鐘	ガバナー補佐 飯合 幸夫
【ロータリー情報研究会】		司会 柏西 RC 幹事 森市 直樹
13:00	開会の挨拶	ガバナー補佐 飯合 幸夫
	地区職業奉仕委員会委員長ご挨拶	土屋 亮平
13:15	卓話	地区クラブ研修委員 安蒜 俊雄
	『私たちは、なぜ週一度ロータリーに集うのか』	
13:45	(休憩)	
13:50	テーブルディスカッション	各テーブルにて
14:40	発表	各テーブル代表者
14:55	総評	ガバナー補佐 飯合 幸夫
15:00	閉会の挨拶	ガバナー補佐 飯合 幸夫

クラブ名	会員総数	出席人数
柏	44	27
我孫子	27	18
沼南	22	12
柏南	31	20
柏西	54	36
合計	178	113

国際ロータリー第2790地区 第10分区
 合同例会及びロータリー情報研究会 席次表

平成22年10月8日 金曜日 ザ・クレストホテル柏

第10分区ガバナー補佐 飯合 幸夫

柏	沼南
我孫子	柏南
柏西	

正面ロータリー旗に向かって左から

A リーダー	ユニット 丸 田	岡田尚子 猫田岳治	渡来忠雄 丸田勝功	島田秀貴 鈴木子郎	志賀裕司 金子 正	大本国平 湯浅千晶	
B リーダー	ユニット 上 村	宮腰次郎 小林 亘	篠塚京子 松本憲事	石橋 登 中村博亘	上村晃一 神林聖光	笹木規子 後藤浩一郎	
C リーダー	ユニット 金 本	萩原宏次 飯島 徹	新田辰吉 金本元章	落合一美 吉野一寛	渋谷季一 勝田健一	渡辺敏行 ゲイビ・アデル	加藤 隆
D リーダー	ユニット 岡 本	風澤俊夫 宮 寛	河合嘉久 上村文明	高田新也 河西晋二郎	石戸卓志 日暮 肇	岡本祐彦 塚本英夫	
E リーダー	ユニット 増 谷	長谷川秀夫 森 秀樹	荒木賢治 服部秀雄	根本健一 岡部久人	森 和夫 増谷信一	尾上吉之 水野晋治	
F リーダー	ユニット 小名子	小名子正彬 友野俊政	小沼宗心 湯下正雄	小笹一夫 榎本洋史	鈴木公三 升谷 庸	溜川良次 岡田靖子	
G リーダー	ユニット 富 澤	常井典夫 妻島不三二	富澤茂樹 嶋田英明	中沢由岐子 松本ユミ	高島 孝 染谷照夫	戸部謹爾	
H リーダー	ユニット 関 口	浅野富美代 小高 潔	中村 裕 酒井正行	中山浩一 杉山 智	吉場幹雄 安川武年	風澤 斉 渡邊治雄	関口和行
I リーダー	ユニット 八 木	猪早恵美子 田中駿平	高本拓司 八木和男	鈴木秀一 田代健一	小池喜之 鈴木桂三	井上圭司 秋元慶一	
J リーダー	ユニット 塩 毛	稲垣典子 山崎康弘	渡辺 隆 鈴木 弘	結城綾子 秋山弘昭	塩毛康弉 森市直樹	小野正廣 椎根達也	
K リーダー	ユニット 神 野	神野美明 大内 啓	中山 勲 中島恵里	立川 明 榊 隆夫	野田 進 鈴木康之	白石和明 小林太時	

■地区委員の紹介

地区職業奉仕委員会委員長 玉屋 亮平(つちや りょうへい)様
 地区職業奉仕委員会クラブ研修委員会委員長 海寶 勘一(かいほう かんいち)様
 地区職業奉仕委員会クラブ研修委員会委員 安蒜 俊雄(あんびる としお)様
 地区職業奉仕委員会クラブ研修委員会委員 堀内 正一(ほりうち しょういち)様
 地区職業奉仕委員会職業奉仕研修委員会委員 中山 政明(なかやま まさあき)様

■参加クラブ紹介

柏ロータリークラブ会長 溜川 良次(ためかわ よしつぐ)様 他27名
 我孫子ロータリークラブ会長 塩毛 康弉(しおけ やすじ)様 他18名
 沼南ロータリークラブ会長 富澤 茂樹(とみざわ しげき)様 他12名
 柏南ロータリークラブ会長 関口 和行(せきぐち かずゆき)様 他20名
 柏西ロータリークラブ会長 中村 佳弘(なかむら よしひろ)様 他36名

国際ロータリー2790地区第10分区 ロータリー情報研究会

開催主旨説明挨拶

第2790地区第10分区
ガバナー補佐 飯合 幸夫 様

7月に新年度がスタートして3カ月が過ぎました。私たちの第10分区も4クラブの公式訪問が終わり残すところ沼南クラブのみになりました。各クラブの会長幹事さんも、落ち着いたころではないでしょうか。

さて、本日の情報研究会は、織田ガバナーと地区職業奉仕委員会の提言で、8月から11月にかけて、第2790地区全14分区で「私たちは何故週一度ロータリーに集うのか」と言う同一テーマで実施されています。織田ガバナーは、ロータリーの基本理念である「ロータリーの綱領」を理解し、「自身のスタイルを磨き」「クラブの物差し」作りを啓蒙することから「ロータリアン自身のボトムアップ」が図れることを熱望しています。職業奉仕の取り組みを最重要と位置づけて、グループでの話し合いの機会を作りました。それが本日の情報研究会であります。

千葉県には伊能忠敬という正確な日本地図を作った偉人がおります。伊能は自分の佳事を引退した55歳から測量を始め日本全国4000万歩を踏破したそうです。200年前にそれほど精緻な地図を作ったのは、彼が仕事を止めて隠居してからであります。

終生学び続けることがいかに大切か、大きな仕事ができるか、という事だと思います。

本日の情報研究会が、お集まりのロータリアン自身のボトムアップにつながることを祈念してご挨拶と致します。

開催に当たり

第2790地区職業奉仕委員会
委員長 土屋 亮平 様



国際ロータリー第2790地区第10分区ロータリー情報研究会の開催に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

本年度のロータリー情報研究会は、飯合幸夫ガバナー補佐様のご指導の下、中村佳弘

柏西ロータリークラブ会長様を始めとする第10分区の皆様のご協力を戴き、情報研究会がこの様に立派に、準備して戴きましたことに対し、衷心より感謝申し上げます。

さて、本年度の織田ガバナーは5大奉仕部門の内、職業奉仕が最も理論的であり、倫理的であると結論づけられました、その様な観点から、今後益々増えることが予想されるであろうRIからの提示、並びに諸々の案件に就きまして、各クラブがそれらに就いて、独自に、その是非々々の判断を下す必要性が想定されます。それ等に対応すべく、各クラブの職業奉仕委員会の中に「クラブ研修委員会」を設置することを要望され、常日頃から研鑽を積んで戴きたいと、断つての要請でございます。

特に、織田ガバナーは今年度・各分区毎に開催されますロータリー情報研究会を地区の職業奉仕委員会が担当するように指示され、テーマも「私たちはなぜ週一度ロータリーに集うのか」と示され、——『出席なくしてロータリーなし』と言いますが——出席の重要性を再確認して、真のロータリーライフを構築して戴きたいとの思いと拝察致します。

出席と申しますと、これはクラブ奉仕の分野ではないのか？

今更そんな当たり前のことを議論するのか？

等のご意見も聞きますが、ロータリークラブの定例会は些か異にします、例会と言っても連日のセレモニー、食事、卓話、それ以外にロータリーの例会にはもっと深遠なものが、存在しなければなりません。それを本日掴み採って戴きましょう。それこそが、職業奉仕を理解する上での大前提であるからであります。

第10分区のロータリアンの皆様、今日の研究会は皆様の研究会であります。

敢えて言わせて頂けば、地区の職業委員の任務は、職業奉仕への道案内人に過ぎません。

どうぞ活発なるご意見を戴き、楽しく、実り多い研究会になりますことを期待致します。

混迷する社会で生き残る道は、唯一つ、職業奉仕の実践「大道無難」に尽きます。

卓話

2010-2011 地区職業奉仕委員会
クラブ研修委員会 安蒜 俊雄 様

テーマ 私たちは何故週一度
ロータリーに集うのか

ただ今、ご紹介頂きました地区職業奉仕委員会の小委員会でありますクラブ研修委員会の委員安蒜俊雄と申します。松戸東RC会員で、職業分類は公認会計士でございます。

織田ガバナーから、クラブ研修委員会に對しまして、各地区で開催されるロータリー情報研究会の主管をするようご要請を頂きました。テーマもご指定いただきまして、「私たちは何故週一度ロータリーに集うのか」です。ロータリーの理念に関わる大変重要なテーマであると思っております。

後ほど、皆様方には、各テーブルにて、このテーマで討議して頂くことになっております。

その前に、これまでにロータリーで学んだことをお伝えし、後ほどのグループ討議の参考にして頂けると幸いです。例会の役割は、様々な視点からとらえることができると思いますが、本日は職業奉仕の視点からお話しさせていただきます。よく「職業奉仕は難しい」とお聞きしますので、実践レベルでの見える可を試みたいと思います。そして例会との関わりをも考えて見たいと思います。

はじめに、ロータリーが大事(理念など)にしていることをおさらいさせていただきます。解釈にご異論のある方がいらっしゃいましたら、今日のところは、安蒜の主観であるご理解頂きたいと思っております。

ロータリークラブは1905年に、アメリカ、シカゴで誕生、1業1会員制と規則的例会出席の原則が確立され、1912年には、ロータリーの綱領とロータリーの標語が採択されました。その後、ロータリークラブは105年間にわたって継続、成長・発展し、現在200以上の国と地域、33,855クラブ会員122万人余を擁しております。

ロータリーに関する基本的な考え方を確認させていただきます。

【ロータリークラブは】：職業倫理の向上を語る同志の集まり (土屋委員長より)

【ロータリーの目的は】：職業倫理を高揚してゆくこと(織田ガバナー、ガバナー月信7月号：ロータリアンの矜持=ロータリーの綱領→(ロータリーの綱領は、・・・→「ロータリーの目的は社会に価値のある企業活動の基本として奉仕の理念を企業に導入し、育んでゆく、特に・・・。」と読み替える。)

【ロータリークラブは何を目的としている集団ですか】と問われることがあります。

ロータリー運動は、一口に言って、人生を如何にいきるべきかを問い続ける専門職業に携わる者又は企業経営者の生涯学習の場です。

会員は一業一会員を原則として週一回の例会をもっています。この運動の目標とするところは、会員相互の交流を通じて自己啓発を

回り、道徳水準を高め、その心をもって自らの職業を通じて社会に貢献することを目指している倫理運動です。

平素の行動の**行動基準として、【四つのテスト(自己評価の観点)】**を示し自己抑制を求めています。

- この四つのテストについては、佐藤千壽バスタガバナーの次のような解説がございます。
- ・ロータリー精神を一番わかり易く表現しているもの
- ・Service above self や One profits most who serves best という哲理を、具体的な行動指針として置き換えたのがこの「四つのテスト」、これこそロータリーの真髄
- ・「近江商人の家訓“売り手よし、買い手よし、世間よし”の“三方よし”は、ロータリーの四つのテストを全部包み込んでいる」
- ・これをもっと煮つめて一番短い簡単な言葉で表現しろ、と言われたら、「相手の立場になって考える」ということ

【二大標語】

- ・超我の奉仕 (Service above self)

ロータリーの哲学

自分の利益だけに没頭することなく、自分の正当な利益だけを受け、先ず奉仕 (*奉仕の心で、利己と利他の調和) せよ。

二宮尊徳「一円観」(善と悪、勤勉と怠惰、真面目と遊び心、貪欲と奉仕)

- ・最もよく奉仕する者、最も多く報いられる (One profits most who serves best)

実践的倫理原則

職業奉仕理念

“情けは人の為ならず”(人に情けをかけておけば、いずれめぐりめぐって自分のためになる。)

成功する商売の道は奉仕することにかかっている。どんな取引でも買手と売手双方に利益するものでなければならない。

【職業奉仕】: 自己の職業にロータリー精神 (奉仕の精神) を傾注させ、世の中に役立たせること(土屋委員長より)

【奉仕の理想】: は「入りては例会で“超我の奉仕”のころを磨き、出でては“最もよく奉仕する者、最も多く報いられる”のころで奉仕の実践をしよう」ということ

【職業奉仕→行動(実践)レベルでの理解(見える可)】を試みたいと思います。

別紙のとおりですが、

- ①お客様に喜ばれて ②社員がいきいきと仕事をして ③利益を出し ④社会貢献する

この4項目を同時に実現するための実践行動ということができると思います。

さて、1905年創立、1923年のロータリーの理念の確立後、理念や週一度例会開催の原型に大きな変更がなかったように認識しておりますが、1905年当時及び20世紀初頭をご一緒に想像してみたいと思います。

ロータリーの誕生についての一般的見解、としては;

「友」より ロータリーとは 「ロータリーの誕生とその成長」 に次のように書かれております。



クラブ研修委員会委員 安藤 俊雄 様

20世紀初頭のシカゴの街は、著しい社会経済の発展の陰で、商業道徳の欠如が目につくようになっていました。・・・青年弁護士ポール・ハリスはこの風潮に堪えかね、・・・

創立時及び20世紀初頭のアメリカ社会・経済を想像すると、正に激動の時代、乱世であったと思われれます。無法・腐敗の街シカゴ、金儲けのためなら人殺しや、不法侵入、不払い、計画倒産、取り込み詐欺、夜逃げ、およそ考えられる限りの悪知恵競争を繰り広げていたということです。“騙される方が馬鹿”の道徳観が公然とまかり通っていたようです。アル・カボネ(シカゴ暗黒街のボス、ギャングスター1899年生まれ~1947年没)という人物もいました。無秩序な自由競争の結果発展した大企業の放任阻止のため反トラスト法の制定がありました。

日本の歴史に関係することとして1905年はポーツマス条約(日露戦争の講和条約)締結ですとかがあります。

昨今、ギリシャ危機をはじめとして世界の金融・経済は、今非常に大きな変化の荒波を受けています。生産者人口の減少(少子高齢化)、デジタル化や、インターネット時代が急激に進行している時代でもあります。そんな中で、既存の市場が消えていく事態に直面している経営者が少なくないようです。今まで売れたものがさっぱり売れなくなる。今までの顧客がぱったりいなくなる。特に最近、単に安ければ売れるというのではなく、顧客のニーズが非常に多様化しており、対応に苦慮している状況もあります。もちろん、業種業態を変え成功している企業も結構多いと思われれます。さらに、リーマンショック後の景気低迷下でも、増収かどうかは兎も角として、史上最高益

を出されている企業もあります。

これは、要するに、世の中が急速に変化しているということであって、変化を嘆いたり変化を止めようと思っても、それは不可能なことです。このようなときに、自分がいかに対処するかを考え、具体的に行動していくことが経営(環境適応業)というのだといわれます。

さて、先輩から教えていただいたことですが、常々、こういうイメージで経営をすることにしております。「お客様に喜ばれて、社員がイキイキと仕事をして、利益を出し、社会貢献をする。」これは、ロータリーの職業奉仕の理念(最もよく奉仕する者、最も多く・・・)を一段行動レベルへ分解したものとさえいえると思います。この経営のイメージを念頭に置きますと、過去約10年の間に起きた様々な企業不祥事は、隠蔽工作も絡み、とてもお客様に喜ばれるものではありません。また、不祥事の発覚も社員からの情報提供が大半とも聞いております。とてもイキイキと仕事をしていたという状況ではなかったようです。

正に、「天網恢々、疎にして漏らさず」悪事を冒した者は天罰をのがれることはできないということ。』と思います。もちろん、利益を出し、社会貢献することに、純粋さを欠いていたと思われれます。不祥事を起こした企業名を挙げるときりはありませんが、中でも、伊勢の赤福が製造年月日、消費期限等の偽装をし、営業禁止になったことは残念でなりませんでした。

素晴らしい経営姿勢で経営されていた創業300年以上の会社と認識しておりました。5月の朔日餅のときに本店を訪れたことがございます。社長は、伊勢ロータリークラブの会員であったようです。この経営のイメージに照らしますと、一部が欠落していたと思われれます。いつ誰が見ているかわかりません。1億(国民)総監査人の時代ですから、法律遵守は基本です。お客様に全く喜ばれないことをしたのです。

現下の経営環境にあつて経営者にもっとも必要とされる能力は、コミュニケーション能力だといわれます。すなわち社員、取引先、株主、顧客など、さまざまな立場の人たちとしっかりコミュニケーションをとって現状を把握し、みんなの思いや実力の発揮できる場がどこにあるかを前提に、会社の戦略・戦術を示すことが求められるようです。建前・形式の時代から本音・本質の時代への現状認識が必要のようです。

ここで、もう他界されておりますが、あるロータリアンが経営されていた会社の経営理念をご紹介します。職業奉仕の理念を格調高く表現されている経営理念であり、「お客様に喜ばれて、社員がイキイキと仕事をして、利益を出し、社会貢献をする。」がしっか

り醸し出されていると思います。会社の存在意義、行動指針、社風、それらの価値観の共有、リーダーシップ、コミュニケーション、様々な重要事項が盛り込まれていると思います。経営資源という言葉がありますが、人、物、金、情報、社風です。正に、この理念の下での社風を大事にされていたように感じます。〈別紙参照〉是非、ご一読ください。1960年、売上高が10億円にも満たない町工場のような状況ときの経営理念の策定であったようです。2007年3月期は売上高579億円経常利益93億円だそうです。

「日々に新たに、また日に新た(ダイヤモンド社)」という書籍に紹介されております。ホームページで確認しましたところ、現在も全く同じ経営理念です。

経営理念の中にも謳われておりますが、「日に新たに、日々に新たに、また日に新たなる・・・」は中国の格言「(殷(いん)王朝 初代湯(とう)王[筍(まこと)に日に新たに、日々に新たに、又日に新たなり(今日の行ないは、昨日よりも新しくよくなり、明日の行ないは、今日よりもさらに新しくよくなるように日々修養に心がけなければならない)」、「新たにする」は“学ぶ、修行する”ことだそうです。

私たちの先輩・友人のロータリアンの中には素晴らしい経営をされている方々が、身近に沢山いらっしゃいます。**師は、クラブ内に、そして隣に**座っていらっしゃいます。

昨今は、先行き不透明、変化の時代、手本がない時代です。潜在能力を開花させながら新しい挑戦をしていく以外、道はないといわれます。これから新たにどんな商品・サービスを開発できるだろうかとか、新しい顧客をこういうやり方で開拓してみようとか、潜在的な可能性を考えてさまざまな試行錯誤していく必要

があるのではないのでしょうか。

時代を大きく見渡せば、今は「乱世」とよんで良いと思います。現下の経済は超円高、デフレです。この乱世は、1985年のプラザ合意(為替協調介入、超円高)から始まっており、60年続くともいわれます。物事が昨日と同じように動く世の中ではなく、今日は昨日とはまったく違うことが平気で起こる時代です。したがって、乱世においてこそ、勉強が必要だといわれます。

では、何を勉強すればよいのか。リーダーシップ、マネージメント、技術のこと、世の中の情勢など。さらには人としての生き方や哲学なども大変重要になってきます。これをしっかりと勉強しておかないと、非常に大きな変化に直面したとき、狼狽したり短絡的な行動をしてしまって、成功から遠ざかってしまうことが多いようです。

また、乱世においては、実学はあまり役に立たないといわれます。即戦力とされる人材が、なかなか成功を持続できなかつたり、組織の価値観を乱すことになってたりします。乱世であればあるほど、基本に立ち返って経営の基礎を固め、特に、社内の価値観(思想)の共有が重要項目です。本来の自分の使命を果たすよう、価値観の共有を図り、経営者も社員も行動していかなければ、未来は開けないといわれます。

今、私たち職業人は、1905年当時と同様に、激動の乱世の中にいるとご認識をいただいて、例会の意義を考えてみたいと思います。

一週間、私たち職業人は、厳しくも慌しい俗社会の中で、職業に専念する毎日なのですが、時には適当な方便もつきながら、利己主義に陥りやすく、様々にけがれた身になっ

て、ホームクラブの例会に出席してきます。

例会の目的は、癒しの場・憩いの場であるのと同時に、異業種の仲間達との親睦や職業上の発想の交換を通じて、相互に分ち合いの精神による事業の永続性を学びあい、友情を深め合い、反省や志の再確認をし、自己心の改善を図ることにあり、その結果としての奉仕の心、即ち、思い遣りの心が育まれてくるのだと思います。

米山梅吉翁が語った『ロータリーの例会は人生最高の修練の場』とは、会員同士が切磋琢磨して、自己研鑽に励む貴重な修練の場でなければなりませんから、例会運営にあたる会長と幹事やSAAは、会員が職業に従事すべき貴重な時間を割いていることに対して、例会に出席するメリットを、沢山与える責任と義務を認識したいものです。

同時に、出席会員は：

- ①例会は、会員各自によってつくられる。
 - ②「貴方の出席が例会を変え、ロータリーを変え、そして、貴方と貴方が関わる家庭・職業・社会生活を豊かにする。」、すなわち、『貴方の出席が、・・・貴方を豊かにする。』の意識をもって、出席していただきたい(・・・したい)と思います。
- 「人は、人の中でしか育たない。」

そして、乱世にあつては、「何気ない会話の中から、大きなヒント・気づきがある。」こんなことを思う昨今でございます。今こそロータリーの草創期に立ち還り、例会にて会員同士が職業奉仕を語り合い・学びあ(意義ある卓話を含む。)ことが、真のロータリー運動の推進につながり、ひいては、新しい会員の増強にも結びつくものと、大いに期待しているところです。

ご静聴ありがとうございました。



テーブルディスカッション

A ユニット

各人のロータリー入会の経緯と現在のロータリー活動について最初に話し合いました。

Aさんは最近、古くからの友人に勧められて会に入ったが、まだ、出席は義務感。

しかし、会費は高いが、いろいろな人と知り合えるのでは入った価値はある…。

ロータリーに入り、初めて地元の企業と認められた。(Bさん)

ベテランの方からは、入会時(30年前)から100%出席を目指している。

例会は癒しの場である。例会に出ることは義務ではなく権利であると考えている

という貴重なご意見をいただきました。

土屋委員長よりいただいたご意見を参考に各人から出た意見をまとめてみると、

ロータリアンは選ばれた人である。ある意味では成功者である。ロータリアンは例会を通じて自己研鑽に励む。クラブは何かをする団体ではなく、例会を通じて他の会員と交流することにより自分の足りないところを発見する。

そして、例会に週に一度出席することが『義務』から『権利』に変わる。それによりロータリアン同士がより親睦を深め仲良くなり、所属クラブへの愛着を深め、自己研鑽の場としてのロータリークラブがより一層発展していくのだと思います。

B ユニット

『主要な意見』

- ①出席はロータリアンとしての義務である
- ②常に毎週出席することが習慣となるので週1回の例会が最良である。
- ③出席して自分の業界の状況と役割をPRして理解を深めるよう努めている。
- ④ロータリークラブは各業界のいわば代表者の集まりであり、他業者の方々と交流して知識を得ると共に不足

の問題が生じた場合でも、その道のプロに相談できるのは例会に出席して初めて可能となる。

- ⑤最初は週1回の例会出席が負担となったが、何年も続けると自分自身の生活のリズムとなり負担でなくなってくる。
- ⑥ロータリアンとしての友情を深め、公平に接し、真実を知る為にも出席が必要条件となる。

C ユニット

・まだ入会して間もない、例会に参加することによって答えを見つけて行きたい。

・職業倫理の向上を高める。

・最近ロータリアン自身の質(モラル)が低下している。

・挨拶からはじめよう。

・まずは、例会に参加する。

・長年ロータリーをやっているが、答えは見つからない。

・「アイ・サーブ」から「ウィ・サーブ」にクラブとして奉仕活動も盛んに行なわれるように。

・奉仕活動に会員がもっと係わり、存在感と友情の雰囲気をつくる

・良い指導者がいるクラブは価値があって、関心が高い



D ユニット

- 上村F ・出席する人が少ない。週1回集まり。親睦。研鑽。
週1、リズムになる。卓話公演で勉強になる。交流が出来る。
→行動を週1、メイキャップは他のクラブ
- 塚本F ・業界の人としか会えない。他の業界の人と友人になれる。
出席率、他の人と話したりするのが重要。
- 風澤F ・異業種交流が有意義。
例会の卓話、勉強になる。
元気が出るし、ロータリアンの意識がでる。
- 石戸F ・長いロータリーの期間では波がある。
限られたメンバー、グループの人が時間を合わせて
- 日暮F ・自分の視野が広がる。
- 学習の場、例会に人生経験が広がる。
・このような場、職業人、職業奉仕の意識。
自分を磨く→自分レベルUP→会社、社員UP
・職業宣言
例会に出れば得をする。
・週1回とは
他のメンバーに会って、磨いた自分
学び合う場、自分なりの研鑽
会員の資格→ロータリーの同じ立場、トップ
クラブ組合員
自分もロータリーに恥じない人間に

E ユニット

- 荒木 ・会に出て、アピール・卓話による知識向上。
- 森 ・第1線の間人には週1はつらい。出席率60～70%のクラブでは休んでも・・・。
- 根本 ・12:30～13:30の昼食時、腹を割って話す→親睦→職業奉仕に通じる。
- 服部 ・アルピニスト的、「例会があるから」他業種との意見交換→力をつける(元気づけ)。
- 尾上 ・毎日でもOK。多種の職業の人と接する(食事)→職業奉仕→週1は必要。
- 森(秀) ・時間をやりくりするのも勉強。自分を知ってもらう。
- 長谷川 ・クラブとの約束、会場がそごう→ホテル、会の格調が上がる。卓話の質が上がる。
- 尾上 ・休みが続くと、出なくなってくる。
- 根本 ・面談する人の数によって手頃になる。
- 服部 ・柏南クラブの例会場は、座席抽選&テーブル模様替え。
- 根本 ・柏クラブは食事と例会の席は別。
- 森 ・沼南クラブは座席抽選、温かい食事が良い。通常は弁当。
- 増谷 ・柏西クラブはSAAが席指定、クレストにきて、10卓×4。SAAがふる。
- 荒木 ・曜日、時間が決まっていれば出席しやすい。出席率の目標達成。
- 尾上 ・日で決めるより、曜日のほうがわかりやすい。

F ユニット

- 各人がテーマについて述べた事項
 - ・1つの会員の責務
 - ・会員との会食時の会話は楽しみ
 - ・「何か得るものが」との期待・楽しみ
 - ・会話(雑談)に元気をもらう
 - ・家庭から会社に携わるようになって、多くの人に出会うことはありがたい
 - ・食事も楽しい(美味しい)
 - ・少しずつ積み重ねの中で、自分も高めてもらっている気がする
 - ・なぜ週1回か?の理由は知らない
 - ・毎週だから続けられそう(生活の習慣・単位となっている)
 - ・みんなと会える
 - ・昼の集まりは仕事で出席が難しいこともあった(入会時)
 - ・以前の会は厳しい雰囲気があった
 - ・職業上の自らの情報をメンバーに提供できる場となっている
 - 柏RC例会は卓話時間が確保されている
 - 他業種・職業人の集まり
 - 楽しい雰囲気です食事=きっかけ=楽しい
 - 時間を例会に咲いている→金銭にかわる価値がある
 - 仲間の安否も確認できる
 - 地元の方々との接触は、同業種(分野)の中だけで得られない、自分を広げる
- まとめ(前提)
ロータリークラブの例会という共通した空間で、
 - (1)会員同士の会話と食は楽しい
 - (2)他業種の職業人の集まりの中で、同業の中では得られないものを感じる
 - (3)何気ない積み重ねの中で、自らが高められているような気がする
 - (4)生活は週単位で回っており、週1回の例会は適当である

G ユニット

- ・ロータリースピリットが判る、顔を見ているいる、30年間無欠席100%
 - ・週1回はちょうど良い(ライオンでは月2回)適切、習慣になりやすい、豊かな気持ちになって帰れる、素晴らしい
 - ・ロータリーは昼間が原則だが夜も良い、仕事でいらついてもロータリーの例会に出ると落ちつく、改めて勉強する機会としては良い
 - ・昼間1回
 - ・45周年、入会しなければロータリークラブのおかげ、毎日会えないが時間の共有はリフレッシュ
 - ・情報を得る機会、楽しみもえる分区大会
 - ・第1例回のみ30分早く、週1度仕事以外の所で気分転換になる
 - ・1業種1人の意識を理解する必要、異業種の集まり、仕事に関係する
- 「ロータリーは心の大学」

H ユニット

- ・人間の哲学のために集っている会は少ない。
- ・月に1度だと、中食を食べるだけになる。週1だと会員同士の話す機会が増えて、内容が増える。仕事上のアドバイス等も、時間が過ぎると話しにくい、タイミングが必要だ。
- ・週1だと退会防止にもなる。
- ・親睦が中心で良いのではないか。倫理的(意味のない又は興味)な話だけだと、魅力がなくなる。
- ・週1位の期間の周期が良いのではないか。
- ・週1はハードである。回数が多いと思う。
- ・週1は、習慣でよい。
- ・本来は異業種の集まりであり、情報を受けやすいのではないか、相談しやすい。
- ・週1の息抜きである。昼だとだらだらにならない。
- ・夜間例会が月一度有るので、会員同士の意思の疎通がとれる。
- ・週1の決まった曜日で日程が取りやすい。メイキャップを他団体に出ることが出来る。
- ・社会に出てからの部活動であり、職業外の良い集まりである。
- ・出席免除の制度について、どう思うか
- ・対象の会員が自分の意思である。自己申告制である。有っても良い。

I ユニット

- ・週1回の例会は、日常性かつ中でのリズムを作り、習慣化することにつながる
- ・習慣になり、例会に出席が続けることが仲間づくりにつながり、楽しみになり、充実感を感じられるようになる(出席の重要さ)
- ・年齢差を超えて学び合い、思いやりを向け合うようになることの意義
- ・1業種1会員:1国1城の誇りある主の集まりであることからくる気のおけない仲間の集い(息抜き)
- ・楽しい卓話、卓話充実の工夫が大切



J ユニット

- ・かつては、入会5年目までの会員を対象にしていた。今回、全員を対象としているのは、新しい情報研究会を目指しているのだろう。
- ・週1回例会を開催するのは、定款(規定)に規定されている。規定審議会で決められている。
- ・月1回程度だと、会員同士の親近感がわく。週1回程度が会員同士の仲間意識にちょうどいい。情報交換かコミュニケーションをとるのに適当。
- ・他業種の人意見の聞ける。ロータリアンである意識が確認できる。
- ・柏(地区)の情報を入手出来る。
- ・奉仕活動が世間に認識されるレベルに達していないのがもったいない。
- ・ロータリーは「アイ・サーブ」会員が各自で社会に奉仕する事を考える団体。
- ・ロータリーの他団体との違いは「職業奉仕」である。会員各自が自分をみがき、社会のためになる人間になる。
- ・先輩と週1回集うことにより、先人の職業奉仕の姿勢、人間性に触れられる。

2010'11 年度 「ロータリー情報研究会」開催趣意書

10'11 年度地区職業奉仕委員会
クラブ研修委員長 海寶 勘一 様
(千葉西RC)

1・織田ガバナーの理念である、「ロータリーの綱領」を基本として、職業に誇りと価値を求めて、高潔な職業人の集まりであるべきクラブ例会の重要性を認識するために、14分区ごとに《ロータリー情報研究会》を開催企画してみました。

《ロータリー情報研究会》ではクラブ例会が、和気藹々と学び愛、感化し愛、敬愛できる場であることを、改めて認識できるように、地区委員卓話を通して、グループ討議を通して《職業人として、毎例会出席する意義と重要性》を熱く語り合いできることを期待しております。

1・クラブでの5大奉仕活動ですが、形骸化されている社会奉仕と国際奉仕活動が、前年踏襲型の新鮮味に欠ける、奉仕活動に低迷しているように見受けられます。

織田ガバナー年度の最枢要事業である、職業奉仕活動の理念を啓蒙することから、クラブ運営の要となるような委員会活動に結び付けられるように、高潔な職業人として、職業奉仕理念の高揚が図れることを期待しております。

1・クラブ例会も慣習化されて、とかく親睦活動に傾注されていますが、日本のロータリーの創始者である米山梅吉翁の言葉にあります、「毎週のクラブ例会は、人生最高の修練の場である」ことを目指して、個々の会員が優越感や期待感をもって、切磋琢磨しあえる活き活きと例会に出席できるように、委員会活動と卓話を通して伝えてみたいものです。

1・慣習化されてしまっているクラブ例会の意義を、地区委員卓話やグループ討議を通して、ロータリーの真髓の喜びを味わうことが、《ロータリー情報研究会》のグループ討議である、グループ・ディスカッションの中から享受してほしく思います。

1・《ロータリー情報研究会》の運営なのですが、ガバナー補佐の皆様の絶大なご支援を仰ぎながら、主宰がガバナー補佐輩出のホスト・クラブ会長として、手作りの情報研究会運営がされるなかからは、地区委員が卓話や研修リーダーになることで、地区委員自身のボトムアップが図れますし、委員出身クラブにも還元できることから、クラブ例会に一層の活性化が浸透できることを期待しております。

尚、卓話やグループ討議の際には、地区委員は決して指導者ではありませんので、皆様との語り合いの中から、ロータリー情報の伝達とか、質問への後日解答等のお手伝いをできるように、あくまでも仲間の一人としてアドバイザー役に徹することをご理解願います。